

大 縄 遺 跡

調査の経過 大縄遺跡は稲沢市井堀町に所在する遺跡で、三宅川左岸の自然堤防上に立地する。周辺の遺跡では東0.4kmに尾張国分寺跡（南側は堀之内花ノ木遺跡）、西に三宅川を挟んで儀長正楽寺遺跡があり、北1.5kmには尾張国分尼寺跡、北東4.0kmには尾張国府跡が推定されている。特に東に隣接する尾張国分寺に関連する古代の遺物が本遺跡周辺においても多く発見されている。

今回の調査は、県道稲沢井堀線建設に伴う事前調査として10月～12月にかけて調査を実施した。調査面積は2,200㎡で、A区～C区の3地区に分けて調査した。

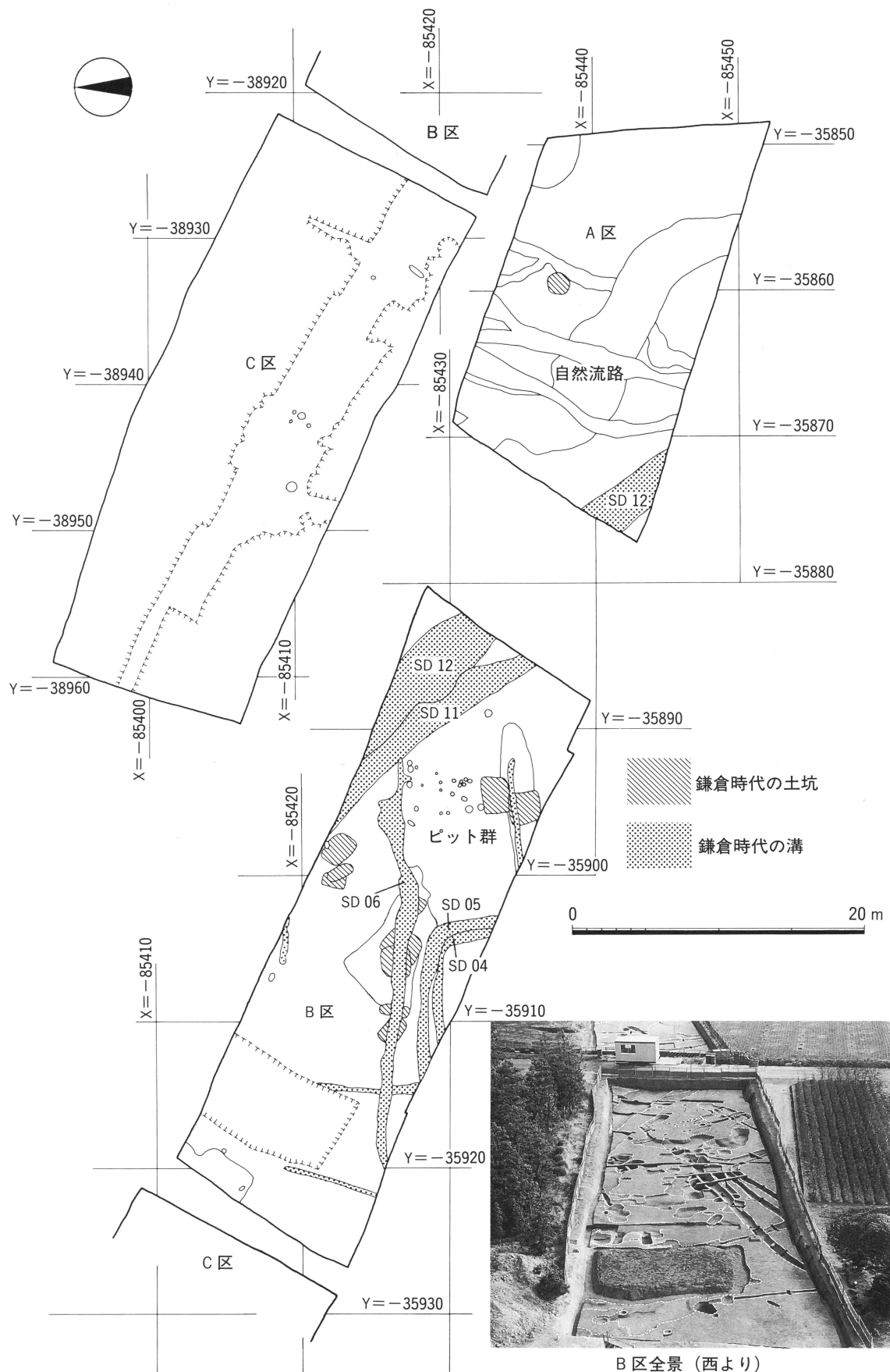
調査の概要 確認された遺構は、奈良時代～平安時代の土坑3基、鎌倉時代の溝9条、土坑10基、ピット群がみつかった。B区の鎌倉時代の溝S D04・S D05は南東に開く鍵状になっており、S D06がS D05の北側を並行してはしり、B区北東側にあるS D11・S D12に流れ込むようにある。鎌倉時代の遺構では全て溝が土坑より新しい関係にあった。出土した遺物では、当初予想された布目瓦の他、須恵器、土師器、灰釉陶器などの古代の遺物と山茶碗、土師器が出土した。中世の大型方形の土坑からは土器などとともに植物質の繊維と細枝の木で編んだムシロ状のものがみつかった。西側のA区、東側に地形的に低いC区では遺構・遺物とも希薄であった。

本遺跡では東の堀之内花ノ木遺跡で見つかった鎌倉時代の区画溝と同様な溝がほぼ真北の方位に直行、平行する方向で走っており、周辺で大規模な再開発が行われた可能性が強い。また中世の屋敷地の区画割などを復元する上でも貴重な資料と思われる。古代の布目瓦が集中して出土する部分があったが、奈良・平安時代の建物跡などは確認できなかった。

（水谷寛明・蔭山誠一）



第1図 大縄遺跡調査区位置図（1：9,500）



第2図 遺構全体図 (1 : 400)